

## 小学2年生に近代的な田植えを伝える

小中学生にとって、地域のことを学ぶことは大変に重要であるとされています

6月17日、山口市立上郷小学校2年生が農事組合法人八方原の田植え作業を見学してきました。

今年の2年生は78人です。例年に比べると少し少ないとのことでした。昨年までは2クラスでしたが、転入生が

あって新年度は3クラスになったと話してくれました。

今回も杉山さんが児童にお話をしてくれました。昔の田植えがどんなにきつい仕事だったか、この田んぼが数日前までは麦が育っていて、それを刈り取ったことや、麦が給食のパンになること、お米がご飯になることなど、児童の興味があるようなお話をしていました。

子どもたちにとって大型の田植え機は、珍しいものですが、光が丘の学校から当地まで2キロメートル近くを歩いてくるので、疲れてしまっている子どもも少なくありません。

この日、田植えを見学した児童は、秋には稲刈り見学にもやってきます。この小さな苗が、たわわに実る稲穂になるのを想像できるでしょうか。

学校では学年によって様々な体験を提供しています。20日には、5年生が山口県立農業高校で「田植えの体験を」しています。一つずつの体験が彼らの成長につながります。



こうした見学を通じて、近代的な農業に興味を持ってもらえるといいのですが

## 市道と公有地の除草清掃に49人

6月19日、市道除草清掃事業が行われました。この事業は地域道であった八方原森下線を市道（当時は町道）に格上げしてくれる代わりに管理作業の一部を地元へ委託するものです。地元にとっては年2回の共同作業ですが、自治会にとっては委託事業費10万円余りが貴重な収入となります。

今回は49名の参加がありました。地域によっては除草しようにも、誰も道具を持っていないので、刈るうにも何もできないというところもあります。

相当な距離と大量の雑草が瞬く間に処理されていきました。今回も見せました、「八方原パワー」。



草刈りの後始末がたいへんな作業になる

# 麦刈り・耕耘・代掻き・田植え



苗箱を積み込み、肥料を充填、オペレーターもサポートも忙しい

6月17日、農地の中央部分の田植えが始まりました。金原農道と西ノ池農道沿いの配水路に水が送られ、週の初めから急ピッチで代掻き作業が行われていました。

田植え作業は一度に八列もの苗を植えることができる大型の機械が2台と、少し狭い圃場用に5条植えの機械が1台です。

植えつける速度はとても速いのですが、苗を積み込んだり、肥料を補給したり、オペレーターだけでは、カバーできません。苗を運んでくる人、肥料を運んでくる人、それらを機会に直接積み込む人。機械一台につき一つのチームがつくられ、それぞれの作業が進みます。まさに、チームワークです。

効率よく植えるには、どこから圃場に入って、最後をどこから出るかということを考えての作業になります。行ったり来たりしているように見えますが、無駄にならないように、考え続ける必要があります。ちょうど一筆で図形を書き上げるような考え方が必要です。

今回の作業は予定通りに4日間で終わりました。これだけの作業を昔ながらの人手で植えるとしたら、どのくらいの人数がいるでしょうか。途方もない時間と労力、それに信じられないような忍耐力が必要になることは間違い



金色に色づいた麦を丁寧に刈っていく (6月2日)

ありません。

数週間前にはおなじ場所に、たくさん麦が実っていました。それを刈り取り、長く残った麦わらを焼却していました。「農業生産」に認められている「火入れ」作業です。これは、関係機関に許可を得て、十分安全管理のもとに行われています。

米も麦も大事作物です。時として売ってもらえていたものが、手に入らなくなるといっても、現実の問題として突きつけられています。国土の保全と食糧安全保障、大切な役目を農業は受け持っています。

## マイクロプラスチックの排出に関係

田植え作業に使われる複数混合肥料、水田の中で一定の期間で溶け出し、生育のタイミングにピタリと当てはまるとして、大変重宝されています。

この肥料について河川や海の「マイクロプラスチックごみ」の要因ではないかという調査が相次いでいます。



毎日新聞6月21日記事による

は他人事だと思っていたら、当事者の一人だったか。

と、主な原因物質のトップは、人工芝の細長いプラスチックだそうですが、2番目に多いのが農業肥料のプラスチックカプセルとことです。

この事実には関係者も否応なく対応を迫られ、全農や肥料会社も2030年の全廃を明言しています。